

《 気候がおかしい、住まいは・・・ 》

パワーアップしている自然力（エネルギー）を再認識して

数年前の夏、わが家のアロエやサボテンがベランダでツヤツヤと元気に生育していました。今まで咲かなかったサボテンが、酷暑の中で4回もアイボリー色の妖艶な花が咲かせたのです。



このところ毎年、地球的世界的規模のようですが、日本列島周辺でも気候・気象がおかしい。いままでは夏台風や秋台風のコースはある程度一定していました。それが、いつからか春には台風が列島を直撃し、ある年は早くも6つもの台風が来襲。それも列島縦断の経路をたどりました。

気象庁はその年の梅雨は平年型と言っていましたが大外れ、関東は空梅雨模様、西の方と東北北陸地域では豪雨となり、大洪水を引き起こしました。そして夏、やはり気象庁は、前年は冷夏だったがその年は例年通りいつもの暑い夏になると言っていました。これも当たらずとも遠からずでしたが、暑さを通り越して猛暑酷暑となりました。太平洋高気圧が大きく強く張り出してきたことが理由のようでしたが……。

日本は気候の四季がはっきりあり、温暖な地域と言われ穏やかな暮らしをし続けてきましたが、東南アジア地域のモンスーン気候そのものになってきたようです。



この関東に限って言えば、かつて冬の一月二月は氷が張り霜柱が立ち、春は霞がたなびき爽やかな五月晴れがあり、夏は青空に入道雲が立ち、確実に夕立があり涼しさを感じたものです。秋、天高く絹雲が広がり、木々はまさしく色とりどりの紅葉を成し、そしてもう一つの季節、梅雨は、シトシト降る雨とその中で鳴くアマガエルの鳴き声とが調和していました。まさに溢れるように四季や五季の季節が確かについこの間まであったのです。それはいったいどこに行ってしまったのでしょうか。地球の気まぐれな一時的現象であればいいのですが……。

夏になると、近くの公園でアブラゼミ、ミンミンゼミのジージー、ミンミンミンの鳴き声をうるさくも愛らしく思いながら聞いていたところ、ガシャガシャ、シャカシャカと大音量がしてきました。昆虫少年時代の記憶では、この鳴き声の蝉は本州以西に多く分布しているクマ蝉と昆虫図鑑に出ていたと思います。

ついにこのさいたま市地域にまで進出してきています。



クマゼミ

また冬には枯枝によく見かけたミノムシがいなくなったとのこと、これも気候の変化・温暖化の表れなのでしょうか。東京はこの100年間で平均気温が3度高くなったとのこと。他の都市は上昇が2度台だから東京の高温暖化は際立ちます。

だいぶ前になりましたが、アテネオリンピックの金メダルラッシュの陰で高校野球に嬉しい奇跡が起こったのです。これまで北海道には渡れないとされていた優勝旗を、駒大苫小牧高校が手にしたのです。その優勝の一因が、東北・北海道も温暖化のせいで屋外練習を秋遅くまで出来るようになったこととか。極端な話ですが、今世紀中ごろには北海道が関東の気候になると予想もされているようです。

吉田兼好の「住まいは夏を旨とすべし」が日本の住まいの形式を如実に言い当てています。その時代の住まいは自然環境・条件を受け入れた形態をしているのでしょうか。

雨風に対して屋根の形状は強い勾配で庇の出が深い。開口部は大きく開放的で風通し良好、構造材は再利用材があり、梁は曲がった丸太材を使うなど、自然の中の材料と技が組み合わせられ構築されています。

しかし、今のこの急激な気候気象の変化は住宅・建築に対しても打撃を与えてきています。兼好の時代の造りを踏まえ、さらにその対応を考えなければならない事態です。自然の力は人間から見るとエネルギー利用というメリットと暴力的なデメリットがあります。



私自身、家づくりに前者の条件を積極的に取り入れた設計をしていますが、このところ手掛けた住宅では以前よりも更に注意深くそのデメリットの対応に迫られました。

例えば強固な基礎と構造づくり、耐震対策、風速風圧には構造体と垂木や母屋を緊結、窓ガラスの強化、高温多湿化には機械設備も必要だが十分な通気と断熱の性能アップなどを実施。その他、これから造るに当たっては再検討事項も多々あります。

関東地域はまだまだ温暖な気候であり続けるでしょうが、このところパワーアップした自然力を再認識し、家づくりを考えていかなければならないと強く思います。終